

注意事項

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【タイトル】

ハイスクールD×D 護りたいもの

【作者名】

くまぐま

【あらすじ】

ある男の子が産まれた。その子は両親に愛されていた。しかし、物心がつくと彼は力に目覚め恐れられ、捨てられた。彼は自分の力の存在理由を考えた。結局その理由は分からなかった。彼はその理由を求めて今を生きるために名を棄てた。……………それから月日が流れる。

第一話 邂逅

現代 駒王学園

私立駒王学園は元女子高だったため、女子の割合が高い。

その男子生徒の零崎誠はどこにでもいるめんどくさがり少年だ。

「おい、誠！」

悪友の松田に呼ばれる。

「なんだよ？うっせーな。また変態発言なら他所でやれ。お前らのせいで俺まで変態だって思われてんだからよ。いちいち受け答えするの面倒なんだよ。」

「全くお前は本当に高校生か？この学園に来て2年目になると言つのに彼女の一人も出来やしないこの現実になにも感じないのか？」

もう一人の悪友の元浜がそう言う。

「お前らの理由と一緒にすんな！」

「そんなお前でも必ず気に入る物を持ってきてやったぞ！見るがいい

！」「ふざけんな！学校でそんなもん出すな！」「ふぎや！」「

げふ！」

松田と元浜にアッパーをかます。

「全く……」じつらは懲りないな。」

そして誠はそのまま下校した。

零崎誠 side

「さっさと帰って飯の支度すっかな。」

俺はそんなことを考えながら、下校していると

「あ、あの……」

見知らぬ声に呼び止められた。

振り向くと

「零崎誠君ですよね？私と付き合ってくださいとい……」

はて？こんな子会ったことないぞ？しかも雰囲気からして裏のやつか。全くついてないな。

「悪い。君とは付き合えないかな。墮天使さん？」

「!？」

すると彼女は姿を変え光の槍でおれを貫こうとした。

「全くここはグレモリーの管轄だ。早く失せた方がいいと思うよ？」

と告げながら俺は光の槍を叩き折った。

すると、魔方阵が出てきた。

「時間切れね。次はないと思いなさい！」

と言って彼女は飛んでいった。

実力からして中級、いや下級かな。念のためにあいつに聞いてみるか。

考え込んでいると。「ここで墮天使の反応があったのだけれどあなたは何者？」

と紅髪の女性、リアス・グレモリーに警戒されながら聞かれた。

「あの今日じゃなくて明日にしてもらえませんか？同じ学校ですよね？」

リアス先輩。」

「分かったわ。明日使いを出すわ。」

と言ってリアス先輩は帰っていった。

ふう、もう隠すのは無理だな。

どうなることやら。家に帰ってから俺は仕事の準備をしていた。

仕事とは墮天使などの裏に対しての仕事だ。

「よし、行くか。今回ははぐれ悪魔っても雑魚がりだからすぐ終わるだろ。」

そう思っていた。だが、「誰？」

簡単にいうと仕事は余裕で片付いたがそのあとにリアス・グレモリーとその巻属に囲まれた。今は仮面と黒い着物で変装しているけどめんどくさい。だが、今回はかりは正体がばれるのはだめだ。今後に支障がでる。

「あなたには関係ない。いくら管轄でも余計なことに首を突っ込むべきじゃない。」

と告げ俺は帰ろうとすると、騎士である木場祐斗に剣の切っ先を突きつけられ

「動かないでくれるかな？」と言われ、内心呆れ

「今言ったことをもう忘れたのか？」

そのまま俺は木場の剣をつかみ握り潰した。

その後俺は瞬歩でその場から立ち去った。

全く本当にめんどくさい。

第二話 力づく

零崎誠 side

次の日俺は何事もなく放課後を迎えた。

すると向こうから黄色い歓声が聞こえる。

「まためんどくさいやつを使いに出しやがって。」

と俺に近づいてくる木場には聞こえないよう愚痴る。

「零崎君だよな？ リアス・グレモリー先輩の使いで来たんだけど。」

「お前についていけばいいんだろ？ ならさっさといっつぜ。」

そう催促する。

「わかった。僕についてきて。」

そして木場についていくと、旧校舎のある一室の前についた。

プレートを見ると「オカルト研究部」と書いていて若干引いた。

「部長、零崎君を連れて来ました。」

と言つと中から「入ってちょうだい。」と聞こえ中に入ると、中は魔

方陣が書かれていていかにもな感じを醸し出していた。

辺りを見回していると、ソファーに座りお菓子を食べている白髪の

女の子、塔城小猫だ。

「じつせ。」

軽く会釈をされ俺は頷く。

そして次は黒髪ポニーテールの大和撫子を思わせる挨拶をされた。

「粗茶です。」

「ありがとうございます。」

社交辞令として答えたがお茶を飲む気はない。

俺がソファーに座ると正面に居るリアス先輩が話始めた。「さて

と、零崎誠君私達オカルト研究部はあなたを歓迎するわ。」

「悪魔としてね。」

知ってるがな。

「前置きはいいから、本題にはいりましょうよ。悪魔、天使、墮天使の

三棘みの関係は知ってますから。」

「なら単刀直入に聞いわ。あなたは何者？」

「ただの人間ですけど？」

「ただの人間が墮天使に勝てるわけないわ。それに墮天使が理由もなしにあなたを襲うわけないわ。しかも私の管轄で。」

「何で味方でもないのに教えんだよ。あほか。」

「理由はこいつのことですよ。神器」

「俺は左手に籠手を出した。」

「これは『龍の手』ね。ありふれた神器よ。」

「そんな生易しいもんじゃないけどな。」

「俺の素性はとりあえず話しましたよ。次は先輩がたじゃないですか？」

「本当はしっているが、こいつ言わないとこじつまがあわない。」

「そうね。」「めんない。改めて自己紹介させてもらっわ。私はオカルト研究部部长でこの子達の王のリマス・グレモリーよ。」

「よく知ってるよ。特にお前の兄の方をな。」

「私はオカルト研究部副部长の姫島朱乃ですわ。駒は女王です。よろしく願いました。」

「姫島？ああ、あいつの娘か。」

「知ってると思うけど僕は木場祐斗。駒は騎士だ。よろしく零崎君。」

「こいつのことも知ってると言えば知ってるか。直接じゃないが過去のこともな。」

「塔城小猫です。……駒は戦車です。」

「こいつは姉と、真逆なんだな。反面教師にしているんだろう。」

「さて、零崎誠君。マコトって呼ばせてもらっわ。あなたにはオカルト研究部に入って貰っわ。」

「は？いきなりなにいった？入らねえよ。仕事と両立できないしな。」

「やですよ。めんごくわい。」

「即答してやっただぜ。」

「今回はなんとかできたかもしれないけどそう何度もうまくはいかないわ。しかも私の管轄で神器所有者を野放しにはできない。拒むな」

「らちからづくても入れるわよ？」

「全く本当にめんどくさい。本気でやったら素性がばれかねないし。ま、今はどちらにしろ本気は出せないし。」

「でも嘗められるのも癪だしな。」

「やれるもんならやってみる。」

「俺は左手の籠手で手刀をつくりリアスの首に突きつけた。」

「俺より弱いやつに守られても邪魔なだけだから。俺に関わるな。」

「俺は部屋をあとにした。」

リアスside

「私は零崎誠という人物を勘違いしていた。」

「彼はただの神器所有者だと思っていた。しかし彼に手刀を突きつけられたとき彼からでた殺気は明らかにこっちの世界に浸かっている者のそれだ。」

「部長？」

「私の女王である姫島朱乃に呼ばれてわれにかえる。」

「大丈夫ですか？」

「え、ええ。」

「彼は本当に何者なんだろうか。」

零崎誠side

「今俺は後悔している。」

「確実に疑われてるな。はあー、もう嫌だ。」

「プルルルル！」

「電話がなる。電話にでると、」

「「よっ、今いいか？」」

「「ああ。で？どうだったんだ？」」

「「お前の言う通り一部の部下の単独行動だわ。」」

「「じゃあ今後は俺の判断で対処するぞ？」」

「「ああ。わかった。すまん、手間かけさせて。因みに部下の名前は」

レイナーレ、ドーナシック、カラワーナ、ミッテルトだ。」

「まったくだ。じゃあな。『アザゼル』。」

「じゃあな、』ゼロ』。」

ちて、とつになることやう。

第三話 聖女

零崎誠 side

オカルト研究部での一件以来、俺は監視されていた。学園では同じ学年である木場。放課後は追跡という形で塔城小猫に監視されている。

不味いな。この数日は仕事の依頼がなかったから誤魔化せたがいつまでもこの現状を放っておくわけにはいかない。

「ったく、あいつらは人の言うことを聞かないのか？」

（それは相棒の自業自得だと思っが？）

と愚痴っていると頭の中に声が響く。

（なんだよドライグ？お前はどっちの味方だよ。）

今俺と会話しているのは俺の神器に宿っている赤龍帝ドライグ。オカルト研究部ではリアス先輩たちにはれたくなかったから黙っていてもらった。めんどくさいし。

（相棒があそこで無駄な威嚇なんぞしなければもっと楽に済んだと思うがな。めんどくさがる性格が災いしたな。これに懲りたら直すんだな。）

この野郎他人事だと思いやがって、めんどくさいのはしょうがないだろう。本当のことだが。いろいろあんだからめんどくさいのは当然だ。

そんなことを考えながら放課後を迎えた。

俺は今帰路についている。いつも通りに監視が居るがな。

はあ。何事なく帰れるといいが。

「はわっー」

後ろから間抜けな声が聞こえた。振り返ると、シスターが転んでい

た。不味い。今悪魔に監視されている中シスターとの接触は三竦みの関係から余計に疑われてしまう。しかし、シスターは周りをキョロキョロしながら困っている。

しょうがないな。深く関わらなければいいか。

(めんどくさがりのお人好し。完全に貧乏クジひいてるな相棒。)

うつせー！ここで無視するわけにいかないだろ！

「なあ。どうかしたのか？」

「あの、えっと、英語分かるんですか？」

「ああ、問題ないからどうしたのか教えてくれ。」

「この町の協会に行きたいのですが迷ってしまって。」

「わかった。ならよかったら案内しようか？」

「いいんですか？ありがとございませう！」

そして俺は彼女を協会に連れていった。

協会に着いた俺はすぐに帰ろうとした。当たり前だ。悪魔に監視されているんだからよ。

だが、シスターがお礼をしたいと言い出した。俺はそれを断った。そして彼女に名前を名乗り帰った。その時初めて彼女がアーシア・アルジェントだとわかった。

そうか……………あの子が元「聖女」か。

リアス・グレモリー side

私リアス・グレモリーは零崎誠を監視することにした。

彼には関わるなど言われたが、あんな殺気を出す人物を野放しにはできない。

そして放課後に小猫に監視させていると思わぬ連絡がきた。

「部長。零崎先輩がシスターと接触しました。初対面のようにですが、

協会に行くようです。」

何ですって!?!彼は三竦みの関係は知ってるはず。やっぱり彼は要
注意だ。

「そのまま監視を続けて頂戴。だけど警戒は最大にしています。」

「はい。」

知ろうとすればするほどわからなくなる。彼は何者なんだろうか
?

第四話 遭遇

零崎誠 side

憂鬱だ。俺の監視がより一層強くなった。もうそろそろ対処方法を考えないとヤバイな。

家に着くと、いきなり後ろから誰かに抱きつかれた。そして耳元で

「お帰りにゃん。誠」

「何でここにいんだよ。黒歌」

「だって会いたかったんだもん」

「監視されてるから当然、本邸に帰れないって連絡したろ。」

「こいつは黒歌。はぐれ悪魔だが、事情がややこしいから俺が引き取った。まあ魔王に打診した上だからなんとかなった。だから監視されているなか黒歌と一緒にいるのはな。」

「で、みんなはお前がここにいてるの知ってるのか？」

「うん。置き手紙書いてきたから大丈夫だよ。」

「わかった。なら買い物してくるわ。食材足りないし。」

「いつてらっしゃい。早く帰ってきてにゃん」

買い物物の帰り、俺は異変に気付いた。それはある一軒家の前で気付いた。というより臭いだな。血の臭い。裏の仕事何かやっていると血の臭いには敏感になってくる。

中に入るとそこには家主らしき人の死体があった。しかし死体の状態が酷かった。そこに何か文字も書いてあった。

「いかれてんな。」

俺は気配のある方に話しかける。

「あーらら。その人間はくそ悪魔にとりつかれてるような感じだった

んでお仕置きしてやったんだよね。ところで君は何？ま、殺すからいいけど。」

全く、めんどくさい。と思っっていたらいきなり悲鳴が聞こえた。

「いやあああああーフ、フリード神父これはいつたい……………」

そこには死体に驚愕しているアーシアがいた。

何でここにいんだよ！くそったれ！

ふいに彼女と目が合う。

彼女は驚き「マコトさん？なんでマコトさんがいるんですか？」

と言ひ。

するとフリードは笑いながら

「理由なんてどうでもいいじゃん。見られたら殺すからじゃだめ？」

「いつの発言はいちいち堪にさわる。命をなんだと思っただがやる。

するとアーシアがいきなり俺を庇うように前にたす。

「マコトさんは関係ありません！かれを傷つけるのは止めてください

!!」

「そんなもんどうでもいいんだよ！バアアアアカ!!」

そう言いフリードはアーシアを殴った。

「アーシアー…」

俺が彼女に駆け寄ると彼女の顔に痣が出来ていた。

そろそろ限界だぞおいこら。

次のフリードの発言で俺はキレた。

「あんたは生きていりゃいいんだから体を痛め付けてやってもいいん

だよっ！」

ブチッ

「おい」

「!？」

「調子こいてんじゃないよ。くず野郎。」

「こいつは絶対に叩き潰す。」

「あーもうつげえっす！だから死んでちよー！」

フリードは光の刀で俺に斬りかかる。だが俺は瞬歩で間合いを瞬でつめる。

「早……」

お前がおせえんだよ！このろまが！

「火竜の鉄拳！」

俺は拳に魔力でできた炎を纏わせフリードの顔面にクリーンヒットさせた。

「げげげー！」

ふん！弱すぎる！

やっぱり古代魔法は加減が難しいな。最低出力で一軒家が半壊してるからな。

さて、アーシアに事情を聞きたいところだがそろそろリアス先輩たちが来そうだからうまく立ち回るにはっと

「アーシア」

「は、はい！」

「今見たことは他言無用でいいか？」

「わかりました。」

と話していると、魔方陣が出現した。

さてどう乗りきるかな。

第五話 友達の本当の意味

リアス・グレモリー side

小猫から連絡が入り現場に着くと、そこには半壊した家があり中にマコトとあるシスターがいた。

「どつという経緯でこうなったか説明してくれるかしら？」

私がマコトに詰め寄ると、「それは後で説明するから今はここから離れようぜ。堕天使が三人近づいているぜ。」

「部長、かれの言つとおり堕天使が近づいています。」

朱乃がそう言う。

「わかったわ。マコト、この魔方陣を使って部屋に来て頂戴。」

私はマコトに魔方陣が書かれている紙を渡す。

「おう。」

マコトが返事をしたのを確認し私達は部屋に帰った。

零崎誠 side

リアス先輩たちが帰った後で俺はアーシアにリアス先輩からもらった魔方陣をアーシアに渡した。

「なんで私に渡すんですか？」

「お前、どうやって逃げるんだよ？お前を逃がすにはそれしかないし、俺はそんなもんいらん。」

「マコトさんはどつするんですか？」

「これから来るやつらに用事があるからいいんだよ。」

「でも……」

「あーもうー良いから行けって……」

俺は強引にアーシアに魔方陣を使わせた。

「これでよし。あとは……」

「おい、人間。ここにシスターがいただろう？どこにいる。」

墮天使の一人ドーナシックが言つともう二人の墮天使ミツテルト、カラワーナが見下すように俺を見て、「こんなやつに聞いてもなんも知らないって。」

「ちっさと殺してしまおう。」

「こいつらも命を軽くみてんのかよ。」

「全く。最近のやつらはとことん俺の神経逆撫でしやがるなあ!!」

「!!」

俺の殺気を受けてやつらは恐怖で逃げ出した。

だけどなあ、逃がす分けねえだろ!!

「来い!天鎖斬月!」

俺は自分の愛刀である『天鎖斬月』を呼び出しやつらに向かって、一撃を放つ

「月牙……天衝!!!」

「!!」

ふう、レイナーレはいなかったが目的を聞き出すために残したと考えればいいか。そんなことより大分遅くなったな。はやく帰ろう。

その後、黒歌に怒られたの言うまでもないな。

次の日俺は朝早くからリアス先輩たちに呼び出された。

まあだろつな。アーシアのこともあるし、何より俺の正体、いや俺の力の事が気になつてゐるはずだ。

裏の事に差し支えない程度に説明するか。

「さあマトトどうしてあなたに渡した魔方陣からシスターが出てきたのかしら?」

リアスは怒気を含めて言った。

「あれをどう使おうが俺の勝手だろ?」

「私達三勢力のことを知っているならこんなことしないはずだけど?」

「それはあんた達の都合だ。だが、勝手なことをしたのは謝る。すまなかつた。」

「わかってくればいいわ。」

「恥をしのんで頼みがある。アーシアを保護して欲しい。今回の墮天

使の行動は単独行動だろう。だから俺が決着をつけるまで頼む！」

「条件があるわ。ひとつはあなたが何者なのかきちんと説明すること。ふたつめはあなたが私達に敵対する意志があるのかと言う質問に答えて頂戴。」

やっぱり俺の力が気になっていたか。

「わかった。まず敵対する意志は基本的にはない。いや言い方が違うな、俺は基本三勢力に対しては中立だ。だけど、どの勢力であってもこの人間界に仇なすなら俺は潰す。」

巻属のみんなが警戒心を強める。

「だが、逆に言えば、俺は今回のような一件以外は干渉しないってこと。」

「わかったわ。なら今度はあなた自信のことを教えて頂戴。」

「ああ。」

俺は裏の仕事につかう力と赤龍帝のこと以外の力の事を話した。

リアス・グレモリー side

「……以上が俺の力の全てだ。」

マコトの力の事を聞いて私達は啞然とした。

こんな人物がいたなんて考えもしなかった。

なんとしてもかれを仲間にしてやるんだから！

「じゃあ、次はアーシアの事を教えてくれないか？」

マコトはアーシアに尋ねた。

アーシア・アルジェント side

私は今マコトさんに悪魔のみなさんに私の保護を御願いしてもらっています。

どうしてマコトさんはこんなに優しいんでしょうか？

私は「魔女」と呼ばれた裏切り者なのに。

そしてマコトさんに私自身の事を聞かれたので、答えました。

その時私は思いきってマコトさんに聞いてみました。「どうしてマ

「トさんはこんな私に優しくしてくれるんですか？」と

零崎誠 side

アーシアにどうしてこんなに自分に優しくしてくれるのかと聞かれた。

ああ、この子は純粹なんだとはっきりわかった。だからこそ誤魔化してはいけないと俺は思い本音を言った。

「友達だと思ってるからだ。」

「友……達……私と友達になってくれるんですか？」

「俺はもう友達だと思ってたけどな。」

「マコトさん……わたしおっちょこちょいです。」

「知ってる。」

「日本語も喋れません。」

「そんなもん教えてやる。」

「世間知らずです。」

「知っていけばいい。」

「アーシア。友達は損得でなるもんじゃない。理屈じゃなく、アーシアが俺と友達になりたいかどうかだけだ。思ったことを俺にぶつけられるかどうかだ！俺はアーシアと友達になりたい！アーシアの正直な気持ちを教えてくれ！」

俺がそう言うとアーシアは涙を流し、「こつ言った。

「私もマコトさんと友達になりたいです！」

彼女は泣きじゃくりながら俺に本音をぶつけてくれた。

そして次の彼女の表情は笑顔だった。

第六話 愛と激情

零崎誠 side

ある日の夜俺はある準備をしていた。仕事のではない。

今回で決着をつけるから、相手が下級の墮天使でも本気でいく。妥協は許さないためかいつものめんどうくさい発言はでない。

「マロト仕事かじゃ？」

黒歌に聞かれる。

「いや、今回は私用で出る。」

「のわりにはいつになく真剣ね。」

「友達のためだからな。」

「なるほどね。じゃあ絶対に成功させなきゃね。いってらっしゃい。」

「いってきます。」

俺は監視をしているグレモリー巻属の使い魔が気づかない速さで振り切り、教会前にきた。さあやりますか。

「月牙……天衝!!!」

やばい、やり過ぎた。これリアス先輩たちとんでくるな。だって、教会が無くなってるとるんだ。

えーとレイナーレ、レイナーレっと。おっ、いたいた。

「ぶはっ、一体何が起こったの？」

俺に気付いたレイナーレは「あなたがやったの!？」

と言うと「他に誰がいるか？」

「まあそんなことより、お前の目的はなんだ？」

「ドーナシーク達を殺つたのもあなた？」

話がそれるな。俺は天鎖斬月の切っ先をレイナーレの首もとに添えて「余計なことは話すな。」と殺気を込めて言う。

「ひっ」

「今回ののはお前らの単独行動だとわかってる。アザゼルから確認を

とっているからな。」

「あなたに言つ必要なんてないわ。」

「こいつまだ自分の立場わかってないのか？」

「俺様参上ー！」

そつこつしているうちにフリードが現れた。

全くしぶといな。

「フリードー早くわたしを助けなさいー！」

「いやー、俺つち的にはあんたがどうなるのがどうでもいいんだよね。それより仮面のあんた！今度さいつこつな殺しあいしようね！ばいちゃー！よいこは寝るよー！」

と言つて、フリードは消えた。レイナーレにいたつては絶望しきつている。早くしないとリアス先輩たちが来てしまつ。考えていると後ろから「貴方はー！」

はあく来ちゃつたか。しょうがない。始末は先輩たちに任せるか。俺が帰ろうとすると、「私はまだ死ねない！アーシアから神器を抜き取つて私はアザゼル様とシエムハザ様からの寵愛を受けるのよ!!」

レイナーレはリアス先輩たちが来て焦りだしたのだろう。だがその発言は俺をキレさせた。

「お前、何か勘違いしてないか？神器を抜かれた人間は死ぬのも知つてるはずだよな？誰かを犠牲にして幸せを得る？ふざけるなよ……」正体がばれないように理性をなんとか保つ。だがこいつは許さない！

「月牙……天衝!!」

俺はレイナーレを殺した。

やることはやつた。あとは帰るだけだな。

だがリアス先輩たちは俺を帰らしてはくれなさそつだ。

「以前のはぐれ討伐以来ね。今度は逃がさないわ。」
「言うわけにはいかない。だから今後こつならぬようにするには、細かい事はサーゼクスに聞け。」

俺はそつ言い瞬歩でその場を去つた。

後日、学園に行くとアーシアが転入してきた。気配からして悪魔に転生した様だ。まあ血とか貴族のプライド何かないからアーシアが悪魔になっても友達だかな。

放課後オカルト研究部ではアーシアの歓迎会が行われた。あれ？俺染まってきた？まあ依頼が入れば忙しくなるし。今はこの平穩を楽しみますか。

裏の仕事

零崎誠 side

俺は今とある屋敷に來ている。ある依頼の詳細を聞くためだ。

その依頼主がまた難癖もある奴でな。色々とめんどくさい。

「いらっしやいませ。ゼロ様。」声のする方を向くと屋敷のメイド長であるグレイフィアに会う。

「ああ、サーゼクスはいるか？」

「はい。サーゼクス様は書齋にいらっしやいます。ご案内いたします。」

グレイフィアに屋敷を案内され書齋に着いた。

ドアをノックすると「入りたまえ。」と声が聞こえたから中に入った。

「よう、サーゼクス久しぶりだな。」俺は基本中立だからタメ語だ。

「そうだね。ところで昨日妹がゼロ、君のことを聞いてきたんだがどうしたんだい？」

もう聞いたのかよ。早いなあの人。

「ここ最近お前の妹によく接触するから会うたびに警戒されると面倒だからな。お前に説明を頼んだんだよ。」

「そうだったのか。まあ世間話もほどほどにしないとグレイフィアに怒られてしまうね。」

確かに、後ろで殺気を放ってるからな。

「で？依頼の内容は？」

多分ろくなことではない予感しかしない。

「依頼はティアマットとの交渉だ。魔獣の森でティアマットが生態系を崩そうとしているんだ。」

「いつは……俺が赤龍帝だって知ってるよな？」

「お前、わざとだろ。ティアマットはドライグとの関係が最悪なのにこの依頼って……」

「はあ。ま、いいや報酬はずめよ。平穩なのはいいことだが依頼がないと家は大所帯だからしんどいんだよ。」

「わかっているよ。本邸に帰ったのはいつだい？」

「一番最近で一週間前だな。」

「お前の妹のせいだけだな！」

「とにかく、行ってくるけど期待するなよ。」

「ああ、健闘をいのるよ。」

「戦うの前提かよ。」

魔獣の森に着くと魔物の気配が全くしない場所を見つけた。

「あそこだな。」

そこに着くとティアマットがこちらをにらみつけている。

「誰だ貴様。ドライグの気配がするぞ。赤龍帝か。」

「そうだけど、おいティアマットこの森の生態系が壊れかけてる。だから住処を変えてくれないか？」

「ふん。私に言うことを聞かせたければ力で示せ。」

「やっぱこつなるか。」

「そのほうが手っ取り早いか。」

（相棒、俺を使うか？）

（いや、今回は使うまでもないな。基本お前を使うときは複数で戦う時だからな。）

するといきなり、ティアマットが火炎を吐き出した。やれやれいきなりかよ。

「ただ俺は火の滅竜魔法を習得しているから火は効かない。」

「残念だったな。俺に火は効かない。今度はこっちから行くぞ。月牙天衝！」

俺はすかさず月牙天衝を放つが躲された。俊敏性もあるな。さすがは龍王の一角。

「なかなかの魔力だがまだ足りんな。もっと本気で来い！」

そんなことしたら今回の依頼の意味がなくなるんだよ！

俺は自然を破壊しない程度にティアマットに攻撃するが、やはり今

のままじゃ無理があるか。

(ドライグ、一撃で奴を沈めるには今の俺の制御された力じゃ完全化しないと無理だ。だが、暴走しかねないから制御頼むぜ。)

(あれは骨が折れるんだがな、わかった。)

「はああああああー！」

俺は魔力を貯め始める。すると黒い魔力のうずが俺を包み込む。

そして魔力が霧散すると出てきたのは、

白い体に仮面をつけ、長い角が生えた一匹の『獣』だった。

side out

『グオオオー！』

白い獣となった俺は唸り声を上げてティアマットに特大の魔力を放

つ

(やっぱりこの状態は力の制御が効きずらいな一発の虚閃で龍王を追い詰めるか。)

今の一撃を受け、ティアマットは全身から血を出し明らかに瀕死状態だった。

『ティアマット。これ以上続けるなら次はその首はねるぞ。』

マコトは殺気を込めて言う。

「降参だ。」

ティアマットは負けを認めた。

(相棒。もうそろそろ限界だ。)

(わかった。)

するとマコトは獣の姿からいつものゼロの姿に戻った。

零崎誠 side

「ぶっ………はあ！しんどかったー！」

やっぱりこの状態は体力、精神力ともに消費が半端じゃない。

もっと強くなる必要があるな。

「おい。」

ティアマットが話しかけてくる。

「なんだ？」

「おまえのあの姿はなんだ？あの時のお前の魔力はまるで『闇』そのもだぞ。」

まあそつだろ。なんせあの姿は……

「さあ、俺にもよくわからん。」

俺の心の影なんだから。

サーゼクスに依頼の報告をしに俺は屋敷に戻った。

結果から言えば、ティアマットは生態系壊さないように暮らすことを俺と契約をかわしてくれた。

さつさと帰って休みたいな。

「ゼロ君、ご苦労さま。」

後ろから声をかけられ振り返ると、グレモリー家当主とその妻であるヴェネラナがいた。

「いたのか。」

「ええ、今帰ってきたところよ。」

「何をしてたんだ？」

「リアスの婚約についての話し合いをしたの。」

へえ、高校生の娘にもう結婚の話か。貴族の考えてることはわからない。

「ま、俺はそつちの事情に首を突っ込む気はないから。」

「はあ、娘の我が魔にも困ったものだ。」

「娘は反対してるんだな。」

「本来、大学卒業まで自由にさせる約束だったんだが早めたんだ。すると猛反対してきたんだ。」

「ゼロ君お疲れ様。」

グレモリー卿と話しているとサーゼクスがやってきた。

「ちょうど良かった。ほらこれ報告書。報酬は後日地獄蝶に渡してくれ。俺は帰る。」

「ああわかったよ。」

そして俺は本邸へ帰った。

サーゼクス side

ゼロ君が帰ったあと父上と話をした。

「何を話していたんですか？」

「リアスの婚約についてだ。」

「サーゼクスはどう考えているの？」

「いささか早計だとは思いますが。魔王である私が口を出しては何もかもが簡単になっちゃってしまいます。」

ですから、この件は当人たちに決めてもらうのしかないと思います。」

「そうか。」

「やれやれ、父上達にも困ったものだ。悪魔だからとは言え自分の欲にリアスを重ねてしまっている。」

悪魔の未来に貴族の価値観はいらなと思うが。未だに古びた風習があるのが、現実だ。」

なあ、ゼロ君。君ならこの現状をどう思う？」

零崎誠 side

次元の狭間のとある場所

俺は今次元の狭間にある本邸に向かっている。

人間界にあるのは表の世界で生きていくための家だ。

ここなら、滅多に人なんて来ないし、三勢力の奴らもそうそう来れないだろう。

まあ、例外もいるが。
そうこうしているうちに、本邸に着いた。
さあ、一週間ぶりの帰宅だ。今日はのんびりするか。

すると屋敷の奥から足音が聞こえてきた。あいつらかな？

「……………」マコト兄ちゃんお帰りなさい!!!「……………」

子供たちが俺の胸に飛び込んできた。元気だなー。

「ただいま。」

「おかえりにゃん。マコト。」

「おかえりなさい。マコトさん。」

子供達とじゃれてっていると、黒歌ともう一人の長髪の赤髪の女性エルザに迎えられた。

「ああただいま。あれ？ほかのみんなは？」

「地下の闘技場で修行してるにゃん。ルーシーとウェンディーは依頼で出てくるにゃん。」

へえ、頑張ってるんだな。

「よしーじゃあ久しぶりに稽古つけてやるかな。」

地下に行くと突然轟音が聞こえた。

おいおい、結構激しくやってんな。

闘技場に入ると、あたりが氷一面の世界に斬撃の跡、鉄屑が散りばめられている。

「……………」いっつらやりすぎだな。」

俺は当の本人たちに拳骨をもらった。

「……………」いい加減にしろ!!!」

「……………」ぶっ!!!」

「まったく。グレイ！とにかく服着ろ！冬獅郎！ここで正解すんな！カグラ！俺が見ていないとここで抜刀すんな！

ガジルてめえ闘技場の鉄材食ってんじゃねえよー！」

「帰ってきてたのかマコト。」

「お帰りなさいマコトちゃん。」

「よう。」

「ギヒヒ！俺は鉄の滅竜魔道士なんだから鉄食つのは当たり前だ。」

「ほう。口答えすんのかガジル。」

「なっ！気を込めてんじゃねえ！めちゃくちゃ痛えんだぞそれ！」

「痛くないと仕置になんねえだろうがー！」

ゴスッ！バキッ！

「ぎゃあああああああ！」

((あゝあゝあゝあゝあゝ))

その後俺は闘技場の修復、そして子供達とじゃれて一日が終わった。

ピッピッピッ

携帯が鳴り出す。

誰だ？こんな時間に？

「もしもし。」

「やっほー ゼロくー」

ピッ

聞かなかったことにしよう。

後日セラフォルーが泣きながら本邸に来たのはいうまでもない。

第一話 同居と婚約

零崎誠 side

俺は今日の前の光景に啞然としている。早朝に人間界の家のイン
ターホンが鳴り、

目を覚まし、確認するとリアス先輩とアーシアがいた。これは出な
いと疑われると思い、

本邸から魔法陣で転移しドアを開けた。

「今日からアーシアはあなたの家にすむことになったから。」

「はあ!?!」

今なんて言ったこの人!?

「ふざけん…ダメですか?」「」

アーシアが涙目でいる。

「うっ。」

くそっ断りづらいな。しょうがないな。

(またお人好しが出ているぞ相棒。)

うるせえ…こんな表情されたら断れねえよ!

「わかったよ。じゃあ荷物を入れて部屋に案内する。」

「良かったわね。アーシア。」

「はい…ありがとうございます…マコトちゃん」

アーシアはいい子だなあ。

ある程度折り合いがついたところで登校時間になった。

アーシアと通学していると後ろから殺気のコもった視線が俺に向
けられる。

「なんであんな奴とアーシアさんが!?!」

「リア充死ね!?!」

めんどくせえ。

しかも特に殺気に混じって特大の嫉妬が近づいてくる。

「死ねえ！」

振り返ると松田と元浜がダブルリアットを仕掛けてくる。俺はそれを二人の頭にアイアンクローをして

止めた。

「朝っぱらから元気だなお前ら。」

「誠説明しろなんて恋愛に興味の欠片もなかったお前がアーシアちゃんに通学している。」

「俺は嫉妬で血の涙が出そうだ！」

「なんでも何も、一緒に暮らしてるからだ。なあアーシア。」

「はい？」

するとアーシアは顔を赤くして頷く。

「あれ顔が赤いぞ？熱でもあるのか？」

日本に来たばかりで気候に慣れてないのかもな。

俺はアーシアの額に自分の額をくっつけると

「だ、だいじょうぶですかー！……はううう。」

「そっか？」

「こころなしか一層赤くなってる気がするんだが。」

「……………死ね!!!!」

おい。おれが何した。

放課後俺はすぐに家に帰った。アーシアはオカ研の活動があるから帰りは別々だ。

まあ帰りまで登校の時みたになのは勘弁して欲しい。

家に着くと俺はベッドに横になり今後のことの考えていた。さてアーシアと同居するなら本邸とこの家の転移も

問題だし、何より裏の仕事だ。ルーシー達も依頼をやってくれているのが救いか。黒歌に無闇矢鱈にこの家にこさせないようにしないとな

おっと。もうこんな時間か。飯の準備しないとな。すると突然魔

法陣が出てきて

リアス先輩が現れた。

「なんだ、どうかしたのか？」

先輩に尋ねると、

「マコト、私の処女をもらって頂戴。至急頼むわ。」

は？何を言い出すかと思えば。

「断る。確かにあんたはいい女だが、今のあんたは何か焦っているようにしか見えないんだよ。」

「お見通しね。既成事実ができれば何とかなると思ったのだけれど。」
するとまた魔法陣が浮かび上がり、今度はグレイフィアが現れた。

「こんなことをして破断に持ち込もうというのですか？こんな下賤な輩に肌を見せるのはいかなものかと。」

ん？俺貶されてないか？

「私が認めたものを下賤と呼ぶのは許さないわ。」

「あなたがここに来たのは誰の意思？」

「総意です。」

「詳しいことは私の根城で話しましょうか。朱乃も同伴させるわ。文句はないわね。」

「王が女王を引き連れているのは当然です。」

するとリアス先輩はこちらを向き

「ごめんなさいね、マコト今日のこととは忘れて頂戴。」

そしてリアス先輩は帰っていった。

はあー、また面倒事か。

次の日の放課後俺はアーシアと木場と一緒にオカルト研究部の部屋にむかっていた。

「珍しいね。マコト君が部屋に顔を出すなんて。」

「まあな。」

昨日のこともあるしな。

部室の前まで来ると木場が「ここに来るまで気配に気づかないなんて。」

俺は本校舎にいる時から知ってたけどな。丁度いいやグレイフィアに細かいことを

聞きたいしな。

部室に入ると

「あら。マトも来たのねちょうどいいわ。」

「昨晩は失礼致しました。私グレモリー家のメイド長をしております。グレイフィアと申します。」

知ってるよ。

「みんな話があるの。」

「お嬢様私からお話ししましょうか？」

「いえ、いいわ。実は…」

会話をしていると突然グレモリー家の紋様とは違う紋様の魔法陣が出てきた。

この紋様は

「フェニックス：」

木場がそう呟く。

あーなるほど。リアス先輩の婚約相手ってフェニックスか。

すると魔法陣から炎が上がりそこから人影があらわれる。

「ふう、人間界はひさしぶりだ。」

その後のグレイフィアの説明でフェニックス側の奴の名は「ライザー・フェニックス」

フェニックス家の三男だ。リアス先輩との婚約が進まないことでやつ自身が来たというわけだ。

にしてもあいつ軽すぎないか？なんかリアス先輩にベタベタ触ってるし、朱乃先輩にいやらしい目向けてるし。

はあ。話済ませて帰ればいいのに。

結局話は進まずグレイフィアが解決策としてレーティングゲームを提案した。

レーティングゲームって確か眷属同士をたたかわせるんだっただか？

そしてライザーは自分の眷属を呼び出しさも自分たちが負けるわ

けがない。言わんばかりの表情をしている。

確かに数を見ても十五人フルメンバーのやつらは有利だ。戦略の幅が広がるからな。

「ところでリアスどうして人間がいるんだ？」

「やっと気づいたんかい！」

「彼は神器持ちなの。」

「あつそ。」

ライザーは俺に見向きもせずさらにはその眷属までもが俺をみくだしている目をしていて。

「こいつら……」

面倒事に巻き込まれるのはごめんだ。抑えねえとな。

そんなことを考えているとライザーは今度は眷属ともいちゃつき始めた。俺に見せつけるように。

「こんなことお前ごときじゃできんだろ？人間」

「いや、できてもしたくねえよそんなお前みたいな万年発情期の焼き鳥じゃないんだから。」

あつ、口が滑った。

「「「「ぷっー」「」」」」

「貴様あああああああーミラ思い知らせてやれー！」

「はっー！」

ミラという子がライザーの命令で棍棒を突き出し攻撃してきた。

もう限界だな。

俺は雷の速さで動き彼女の棍棒を砕き羽交い締めになっている。

「動けば首を折るぞ。」

そう告げると彼女は降参した。

「くっーおい貴様！次のレーティングゲーム貴様も出る！俺が直々に燃やし尽くしてやるー！」

おい！余計なこと言つな！

「非公式ですので参加は可能です。サーゼクス様には私のほうから打診しておきます。」

では十日後にレーティングゲームをさせていただきます。」

「はあ!？」

「ちよっ、待ってくださいよ！俺の意思は？」

「そんなものはない！」

ライザー達はそう言い残し帰っていった。

なんでお前が決めてんだよ!!!

くそっ！リアスといいライザーといい貴族は自己中ばかりか！

という訳で俺のレーティングゲーム参加が決まってしまった。

第二話 修行と願い

零崎誠 side

翌日、俺は早朝、リアスに呼び出された。

関わる気はないんだが、断るとまた面倒になるからな。

「今日からレーティングゲーム前日まで特訓するわよ！」

はい？アーシアだけならともかくなんで眷属でもない俺が特訓なんぞしなきゃいかんのだ。

「断る。」

まあ当然だわな。これ以上深追いしたらいけない。

「あなたもレーティングゲームに出るのだから当然でしょ？」

「ふざけ」

♪♪♪

携帯が鳴り、ディスプレイを見るとサーゼクスからだ。

「ちょいまち。」

「部室から出て電話に出る。」

「もしもし」

「やあ朝からすまないね。依頼をしたいんだが。」

「なんだ？」

「グレモリー眷属の修行の手伝いを依頼したいんだ。」

「わかった。だがレーティングゲームの勝敗に関係なく報酬はもらうぞ。」

「わかっているよ。できるだけ善処して欲しい。場所はここちらが指定した場所に行ってくれ。」

「了解した。」

電話を切り部室に戻る。

「ゲームには出てやるがお前らに合わせる義理はない。」

「と、いいおれは部室を出て家に帰った。」

さて仕事の準備をするか。

リアスside

特訓の件をマコトに話すとあっさり断られ帰ってしまった。

全くあの子は協調性がないというか。

すると魔王であるお兄様から通信が来た。

「やあリアス。今日から特訓だそうだね。」

「はい。はっきり言って今の私達はライザー達より弱いです。

ですから、一日も無駄にできませんので。」

「それはいい心がけだね。ところで君は以前ゼロ君について聞いてきたね。」

「はい。」

「彼が君達の修行の手伝いをしてくれるようにしたから、頑張ってくれたまえ。」

「はい？」

「なぜそんなことを？」

「君たちだけでは限界があるだろう。だから彼に頼むことにしたんだ。」

でもこれは彼のことを知るのにいい機会かもしれない。

「わかりました。」

こうして彼、ゼロと修行することがきまった。

零崎誠side

俺はサーゼクスからの依頼でグレモリー眷属の修行を手伝うことになった。

まあ、ゼロとしていくから問題ないが面倒くさいな。

本音を言えば勝手に結婚してくれ。

まあ俺の見立てじゃ十日でライザーに勝つなんて絶対無理！

だから俺のすることはあいつらを重傷を負わないレベルまで上げるじつ。

それがいま最大限できることだ。

そんなことを考えいると、指定された場所についた。

ん？別荘があるな。ここで暮らしながら修行するってことか。じゃああいつらが来る前に着替えるか。

俺はゼロの格好でグレモリー眷属が来るのを待った。

リアス side

私たちは今修行をするためにグレモリー家が所有する別荘に向かっていた。

お兄様が言うにはゼロもこっちにむかっているらしい。

彼がいようがいまいが関係ない。

私たちはこの修行で強くなりライザーを倒す！

山を登りきり別荘に着くと別荘の前にゼロが仁王立ちしていた。

「よう。遅かったな。」

「あなたこそもう居たのね。」

「サーゼクスから聞いていると思うが、この十日間お前らの修行を手伝うことになった。」

「ええ聞いているわ。よろしく願いますわ。」

「なら早く着替えてくるといい。時間が惜しいんだろ？」

ゼロに促され別荘に入ってしまった。

零崎誠 side

リアスたちが着替え終わると俺はさっさと修行に入ろうとした。

「さてじゃあ……待って頂戴。……なんだよ。」

「お兄様の計らいでこうなってしまったけど、私達はあなたの実力を知らない。」

だからあなたの実力を知りたいの。」

なるほど、俺を信頼する要素が足りないってわけね。ま、ここで実力差を分かせておけば要らん口答えもされなくていいか。

「わかった。で、誰が相手をするんだ？」
「あなたは剣を使うようなら、祐斗。」
「はい部長。よろしく頼むよ。君の実力を見せてくれ。」
「ああ。あっ、そつだ駒の特性を使ってこいよ。
じゃないとと実力を知る前に終わるぞ？」

そつ俺が言うつと木場の雰囲気が変わった。本気になったか。
「では、始め!!」

開始の合図と共に木場は騎士の特性を使い高速移動している。
速さはなかなかだが...

その間木場から放たれる斬撃を俺はすべて刀で受け流した。

「もついい。」
俺は木場の首根っこをつかみ地面に叩きつけ首元に切っ先を向け
て

「まだやるか？」

「降参だよ。」

木場に勝った。

「これで文句あるか？」

「十分よ。」

「なら良かった。今の木場を見てわかった。お前らはポテンシャルは
あるがそれだけだ。十日間でできるだけものにさせる。」
「
思ってたよりみどころはあるしな。」

木場 side

僕、木場祐斗はゼロと言つ男の力量を見るため試合をした。結果は
僕の惨敗だった。

彼は強い。正直に思った。純粹に一騎士として。

僕は強くなる！部長の騎士として。

『木場と剣術修行』

俺は今木場と剣術の修行をしている。

「違う。斬撃とお前のスピードを合わせるんじゃない。

スピードを利用して斬撃を鋭くするんだ。

今のお前は脚に目が行っているが、本来速さは一挙手一投足に対してのものだ足だけ速くても意味がない。」

「ごうかい？」

すると木場は突然うごきにキレが出てきた。

「そつだ。足だけじゃなく全身に意識を集中させる。それを維持した動きをするのがお前の修行だ。」

それ続けていると木場は緊張の糸が途切れると、よほど疲れたのだらう。倒れた。

初日だしこんなもんか。

『小猫と組手』

次は小猫と組手だ。「さてやるうか。」

「お願いします。」

互いに準備ができ組手をはじめ。

十分後……

「当たってください。」

「それだと組手にならない。」

なるほどな。大体わかった。

「組手をしながら聞け。おまえは小柄なせいでリーチが足りない。だからそれを補う修行をする。」

「どうするんですか？」

「リーチが関係ない戦法をとればいい。相手の死角で攻撃をするのが

いいだろうな。

よし、そうしよう。まずは動きの先読みからだ。それが基本だからな。」

「はい」

「こうして小猫との修行メニューが決まった。」

『朱乃とアーシアの魔力制御』

「大きな魔力も制御できなきゃ宝の持ち腐れだ。だから二人には魔力の圧縮と拡散をやってもらう。」

アルジェントはまず、魔力で球体を出してくれ。本格的な修行はそれからだ。姫島は自分の得意な魔力の形で魔力の圧縮と拡散の練習をしろ。」

それから技のバリエーションを増やせ。」

「はい！」

「分かりましたわ。」

これはもうすぐに大成しそうだな。」

『リアスと戦略の勉強』

「お前は、特に力の増強はしなくていい。むしろ経験面で不足している部分が多い。」

だから最低限の予測能力と知識がいる。そこを養ってもらおう。」

「わかったわ。」

「じゃあまずはライザー眷属がやりうる作戦を一通り列挙しろ。」
そこから俺の物差しでの最低限をリアスに教えた。」

初日は全員疲弊しきっていた。全く甘いな。」

夜 夕飯の時間グレモリー眷属は夕飯を食べていた。

するとアーシアが「食べないんですか？」

「俺はいい。」

実際ある依頼で一ヶ月絶食してたからな。体が適応している。

その後俺はグレモリー眷属全員の入浴後風呂に入った。

入浴後明かりがついてるのが気になり見てみると、リアスが書物を読んでいた。

明日に支障がきたしても困る。

「おい。」

「きゃっ！ちょっとびっくりするじゃない！」

「知るか。そんなことより早く寝ろ。明日も早い。言いたいことはそれだけだ。」

「……ねえ。」

「なんだ。」

「あなたはどうして裏の仕事をやるの？仮面をかぶってまで」

「生きるためだ。俺にはそれしか生きる道がなかったからだ。お前ら人外には魔力は普通のものかもしれないが

人間してみたたら恐怖の対象だ。だから俺はゴミみたいな人生を送りたくないがためにこの道を選んだ。」

「仮面は？」

「それに関しては言う気はない。」

「そう」

「俺からも聞いていいか？」

「何？」

「なぜお前はライザーとの結婚を嫌う？貴族同士の政略結婚なんてざらだろ？」

「私は『リアス』なの。ライザーや他の貴族たちは私を『グレモリー』のリアスとしてみるわ。」

私は私を『リアス』個人として見てくれる人と一緒にになりたいの。」
「そうか。すまんな変なこと聞いて。」

「いえ。私の方こそごめんなさい。…もう寝るわ。おやすみなさい」
「ああ。おやすみ。」

個人として見てもらいたか…。

俺と同じか。一人の人間として見てもらいたい俺と…

この日俺のリアスに対する見方が変わった。

その後の残り九日間グレモリー眷属はそれぞれの修行をこなし、確実に成長した。

さて、どこまでいけるかな。

そしてレーティングゲーム当日を迎えた。

第三話 矛盾と敗北

零崎誠 side

レーティングゲーム当日。

俺は今自室にいた。

今回の依頼はゲームの勝敗は関係ない。

適当に流すか。本気を出すと正体がバレるか、少なくとも多くの悪魔の目に留まる。

そんなことを考えていると、

コンコンー

アーシアか。

「ぎんぎん。」

アーシアはシスター服を着ていた。

「マコトさん。時間まで一緒にいてもいいですか？」

「ああ。いいよ。にしてもその服。」

「部長さんが自分の一番戦いやすい服装でいいというので。」
なるほどな。

ちなみに俺は駒王学園の制服だ。

するとアーシアはいきなり抱きついてきた。

「少しの間じっしていいですか。」

アーシアの体は震えていた。

「やっぱり怖いか？」

「はい。でもマコトさんがいてくれるので大丈夫です。」

「そうか。」

アーシアだけは全力で守ろう。友達として・・・

時間になり俺たちはオカ研の部室に入ると俺たち以外全員集まっ

ていた。

「全員来たわね。」

するとそれを確認したグレイフィアが説明を始めた。

「開始十分前になりました。この魔法陣を通るとレーティングゲームの戦闘フィールドに転移します。」

使い捨てのフィールドなので存分にどうぞ。」

「なお今回の試合の様子は両家の皆様もご覧になられております。さらに魔王ルシファー様もご覧になられております。」

それをお忘れなきよう。」

！サーゼクスが見ているのか。余計に本気は出せないな。

「なお、ゲーム終了まで戦闘フィールドからは出られません。」

はあやり過ぎすのも無理か。

説明を受けると俺たちは魔法陣に乗り転移し、戦闘フィールドに移動した。

「ん？まさか校舎がフィールドなのか？」

そう疑問に思っていると、

「みんなこれを。」

リアスに小型のイヤホン型の通信機を渡された。

「おい。俺はあんたの眷属じゃないが。」

「マコトは今回だけでも私たちと共闘するんだから付ける！」

「わかったよ。」

体育館前

俺は今小猫と隠れて体育館前にいる。

あのあと作戦会議で俺と小猫がパートナーになり体育館を占拠することになった。

すると、堂々と体育館に入ってきたライザー眷属。

おいおい定石無視かよ。

「そこにいるのはわかってるのよ！グレモリー眷属さん。」
まあ気も使ってないからバレるだろうな。

「行くぞ。」

「はい。」

俺たちは素直に出た。

えーっと、兵士が三人に戦車が一人か。

なら……

「戦車は任せる。」

「分かりました。」

そして俺は兵士三人に体を向けた。

「あなたにつけた屈辱、ここで返すわ！」

兵士のミラだっけ？が向かってきた。

「あっそ。」

こいつあの時より動きにキレがある。まあ人間だからってなめてたんだろ。

だが、それでも弱いなこいつ。

俺はミラの棍棒をつかみ「火竜の鉤爪!!」

炎をまとった蹴りをくらわした。

「くっ……」

あれ、弱くしすぎたな。

すると後ろかエンジン音が聞こえてきた。ん？エンジン音？

振り向くと双子の兵士がチェーンソーを持って突っ込んできた。

「バラバラー!!」

「解体しまーっす!!」

ガジルは喜びそうだな。

「連携はなかなかだが動きが遅い。武器の選択を間違えたな。」

俺は攻撃をさばきながら言う。

そうしていると通信が入ってきた。

「朱乃の準備が出来たわ。二人共もついいわよ。」

「了解。小猫！」

俺は小猫を呼び、合図をした。そしてライザー眷属が集まったところ、

「雷竜の…雷陣!!」

雷の渦で囲んだ。

そして俺たちは体育館を後にした。

その直後特大の雷が体育館を襲った。

「ライザー・フェニックス様の兵士三名、戦車一名リタイア」

アナウンスが流れる。

ふう、まずは第一段階は成功か。

今の攻撃は朱乃のだ。

威力は上がってるな。

感心していると、背後から殺気が感じられた。

「!!」

俺は小猫を突き飛ばすと俺の周りが爆発した。

小猫 side

私は零崎先輩にいきなり突き飛ばされると、先輩の周りが爆発した。

「先輩!」

「零崎君!」

「撃破」

上空を見るとライザーの女王がいた。

「獲物は目的を達成した時が一番警戒心が薄れるのよ。」

そつ言いながら彼女は笑っていた。

すると後ろから

「ゲホッゲホッ!おい威力の割に煙ひどいな!」

零崎先輩は血を出しながら煙の中から出てきた。

零崎誠 side

俺はライザーの女王の爆撃を受けた。

しかし、見た目とは裏腹にそこまでダメージは受けていなかった。なぜなら滅竜魔法と赤龍帝の籠手の倍加で身体能力を上げたからだ。

一回の倍加なら大丈夫だろう。

ふむ、女王ならここで潰すべきだが・・・

「ライザー・フェニックス様の兵士三名リタイア」

木場か・・・

「ここは私に任せて二人は木場君と合流してください。」

「わかった。小猫行くぞ。」

「はい。」

踵を返し俺たちは体育館をあとにした。

グラウンド

俺たちは木場を見つけたが木場はライザーの騎士と一騎打ちをしていて。

あたりを見渡すと、ライザーのもう一人の戦車と・・・なんだあいつ？優雅にお茶飲んでるぞ？

眷属じゃないのか？

むこうがこちらに気づいた。

「あなたがお兄様をこけにした人間ですか？」

ん？お兄様？

「この方はライザー様の妹君のレイヴェル・フェニックス様だ。」

俺の視線に気づいたのか戦車の女が答える。

「もしかしてあいつ妹を眷属にしてるのか？」

すると当の本人が頷く。

まじか・・・

「先輩ここは私がやります。」

まあ、小猫に任せても大丈夫だろ。

「頼む。」

そして俺はレイヴェルと話し始める。

「さっきこけにしたというのが誤解だ。俺は別にライザーの考えにどうこう言いつもりもなければ婚約のことに文句をつける気もない。」

「なら、なぜこのゲームに？」

「…言われてみればそうだ。他の悪魔達より接しているからといってあいつらを特別視しているわけじゃないのに何故だ？」

「わからん。」「こ最近考えていることと実行していることの辻褄が合っていない。」

お人好し……

ドライグや家族のみんなに言われている。

考えていると、残りのライザー眷属が集まり俺に言う

「ねーねー人間さん。ライザー様とあなたのところの王が一騎打ちするってね。」

なに？すると通信が入ってきた。

「ママトヤン。」

アーシアからだ。

「どうした？」

「部長さんと私は屋上にいます！部長さんがライザーさんの一騎打ちの提案に応じました！」

「アーシアもだど！俺は屋上を見上げるとライザーの炎とリアスの魔力がぶつかっているのが見えた。」

「まずい！」

俺が屋上に向かおうとすると、「リアス・グレモリー様の女王一名リタイア」

「朱乃がやられた？」

「だとしたら…そう思ったのも束の間、木場と子猫のいたところが爆発した。」

「リアス・グレモリー様の騎士、戦車一名リタイア」

「もう動けるのはあなただけ、どうします？」

た。

リアスside

負けた。私は初めてのレーティングゲームで負けた。

敗因は私にある。

王でありながらライザーとの一騎打ちに応じてしまったのが最大の敗因だろう。

そんなことを思っていると、マコトがこちらに来て、

パンツ！

私の頬を叩いた。

「いい加減にしろよ。このわがまま娘！」

「今回のゲームがお前だけのものだと思ってるのか！木場の、小猫の、姫島先輩の、アーシアの思いもかかってたんだぞ！」

呆然とした。口では関わる気がない、面倒だと言っていた彼がこんなことを口にするなんて

「じゅめんなさい……」

私はそれしか言えなかった。

それを聞いた彼の表情は悲しそうだった。

第四話 決意と力

零崎誠 side

レーティングゲーム後からの数日間俺は本邸の書斎であることを考えていた。

アジアには数日間家を空けると言っているから大丈夫だ。考えことは俺の気持ちについてだ。

わからない。なんでこんなにいらつくんだ。

依頼は順調にこなしたし支障はないはずだ。

なのにやけにグレモリー眷属、いやリアスのことが気になる。

コンコン！

そんなことを考えているとドアをノックする音が聞こえた。

「どうぞ」

「入るね。」

黒歌だった。

「何悩んでるの？」

「別に。それよりなんか用か？」

「グレイフィアが来たわよ。」

何？

「わかった連れてきてくれ。」

「うん。」

そしてグレイフィアがやってきた。もちろん俺はゼロの格好で対応している。

「で何の用だ？」

「今回の依頼の報酬とライザー様とリアス様の婚約パーティーの招待状を渡しに来ました。」

「そりゃどうも。」

俺は招待状をもらい中身を見ると、グレイフィアに警戒心を剥き出しにしてある質問をぶつけた。

「いつから俺が『零崎誠』だと気づいていた?」

そう招待状の送り先の名が『零崎誠』だった。

「あなたがライザー様に初めてお会いした時ライザー様の兵士とのいさかいで見せた動き。」

確かに魔力の質は違いますが動きはそっくりでした。決めてはレーティングゲームです。

あなたが最後に見せた移動術。あれは確かに『ゼロ』様のものでした。サーゼクス様も気づいています。」

「で、知ったからどうする?」

「あなたはこちらの内情に関わる気はないと言っていました。ですがあなたはゲーム後にリアス様に怒りをあらわにしていました。」

「だからなんだ?」

「怖いのですか?」

「なんだと?」

「怖いのですか? 人と深く関わるのが。」

「黙れ。」

「あなたは種族問わず深く関わることをしない。それはあなたが恐れしているからでしょう。深く関わり傷つくのが。」

「黙れ!!! お前らに何がわかる! 最初から何もかもも持っていたお前らに俺の何がわかるんだよ!! ああ!?!」

「確かに私達はあなたのことを何も知りません。ですがあなたはもうひとりでないでしょう? 傷つくことを恐れては前に進めないことは確かです。」

「……帰ってくれ。」

「失礼しました。」

「サーゼクス様からの伝言です。『本当の君を見せてくれ。本当のキミの心。』だそうです。パーティーは明日です。」

グレイフィアが帰ったあと俺は考えていた。俺の心が…

(相棒)

(なんだ。)

(行かないのか?)

(ふざけるな。俺には関係ないことだ。)

(相棒!)

!!

(甘ったれるな!グレイフィアの言った通りお前は怖いだけだ!人と
のつながりを作ること!)

確かにお前は一度つながりを切られた。だが今はもうつながって
いる家族がいるだろ!)

俺は...

(なあ相棒もう自分に正直になってもいいんじゃないのか?)

...

(そつだな。)

俺はもう逃げない。つながりにも、自分にも!!

俺はエルザと地下闘技場にいた。

「ここに呼び出したってことは修行でもするんですか?」

「いや修行じゃないんだ。エルザ。俺にかけてる魔力限定をお前が
担っている分解除してくれ。」

「嫌です。」

「頼む。」

「前に一度限定解除したら魔力を出した反動で重傷を負ったの忘れた
んですか!私の分は全体の四割を占めてるんですよ!」

「わかってる。けどもう自分に嘘をつきたくないんだ!!」

「私も家族が傷つくのをみすみすやらせるわけないでしょ!!」

「頼む!!!」

俺は土下座をした。

「...分かりました。ただし、条件があります。」

「ああ。で条件とは?」

「まず『無月』は絶対駄目です。あと完全虚化での滅竜奥義も駄目で
す。最大限譲歩して通常状態での『雷炎竜』です。それも滅竜奥義禁

止です。」「
「…わかった。」「
「では、『限定解除』!!」
体に魔力が溢れてくる!!
「エルザ。ありがとう。」「
「絶対無茶しないでください。」「
俺は闘技場から出て行った。

人間界の家に転移し、アーシアにリアスを連れてくると言った。
そして「アーシア、お前に、いやみんなに言わなきゃいけないこと
があるから部屋で待っていてくれ。」「
「分かりました。絶対部長さんを連れて帰ってきてください。」「
「ああ。わかってる。じゃあアーシア、行ってきます。」「
「いってらっしゃい。」「
俺はアーシアに見送られパーティー会場に向かった。

パーティー会場

「ここか。」「
俺はリアスとライザーの婚約パーティーの会場の扉の前にいた。
さてと
まずは気づいてもらわないとな。
「月牙…天衝!!」
俺は扉を切り破った。

リアス side

私は今唾然としている。突然扉が切り破られたのだ。
「なんだ!？」
「何事だ!？」

周りの上級悪魔が慌てる。

「あいつは…」

ライザーはある人影に気づいた。

「よう…：…焼き鳥。」

マコトだった。

何でマコトが!!

私は驚愕した。だけどそれ以上に驚いたのはマコトの持っている武器だ。

なんで…：…彼が『ゼロ』の刀を持っているの？

「どうして…」

「自分に正直になろうと思ったんだよ。」

するとライザーが激昂し

「ここはお前が居ていい場所じゃない!!おい!この人間を追い出せ

」!

ライザーは衛兵に命令した。

「マ」

するとマコトは「やかましい!!!」

マコトの周りに電撃が走った。衛兵は痺れて動けないのだろう。

「くっ…貴様!!」

ライザーは体に炎を纏わせている。

すると後ろから「私が彼を呼んだんですよ。」

「お兄様!!」

「彼は面白い魔法を使うようですからね。それを間近に見てみたかったですよ。」

「サーゼクス様!そのような勝手は…」

「いいではないですか。この間のレーティングゲームは実に面白かったです。」

しかし、彼とライザー君の戦いが行われなかったのが見てみたいんですよ。」

「ではサーゼクスお主はどうしたいのだ?」

お父様がお兄様に話しかける。

「いえ父上。私は可愛い妹の婚約パーティーを派手にしてあげたいですよ。」

お兄様の一言で全員が黙り込んでしまった。

「さて零崎誠君お許しが出たよ。ライザー今一度君の力を私に見せてくれるかな?」

「いいでしょう。このライザー身を固める前の最後の炎をお見せしましょ!!」

「零崎誠君君が勝った場合の対価は何がいい?」

「サーゼクス様!」

「なんとということ?!」

「人間ごときに対価など!!」

「こちらから頼んでいるのですから。さあ何がいい?」

お兄様は周りの声などお構いなしに、マコトに尋ねる。

「そつだな。リアス・グレモリーをくれ。リアス・グレモリーという悪魔を。」

マコト……

零崎誠 side

会場の中央に急遽作られた空間

そこで俺とライザーは立ち向かい合っていた。

あの野郎余裕の表情しやがって。

(相棒。どうするんだ?)

(エルザとの約束があるからな。『無月』は使えないし、完全虚化の滅竜奥義が使えないとなると

久しぶりに禁手を使う。俺の正体を示すいい機会だ。)

(そうか。よし!久しぶりに暴れるか!!)

(応!!)

するとライザーは「貴様ごとき人間に俺が負けるわけがない。さっ

「さと終わらせる!!」

「では開始してください!!」

開始の合図が聞こえた。

するとライザーは炎の塊をぶつけてきた!!

「WelshDragonBalanceBreaker!!!」

火球が俺に当たる。

「マ「ト」!!」

リアスの声が聞こえる。

「はははははははは!!もう終わりか!人間は脆いな!!」

決めた。こいつは精神をへし折る。

「もう終わりか?」

「何!?貴様その鎧は!貴様の神器は龍の籠手のはずだ!」

「それはお前の勘違いだ。俺の神器は滅神具の『赤龍帝の籠手』だそしてこの鎧はその禁手、『赤龍帝の鎧』だ。説明はこのくらいでいいか。そろそろ行くぞ!」

俺は瞬歩でライザーに接近する。

「火竜の咆哮!!翼撃!!碎牙!!炎肘!!剣角!!」

「くっ!!」

ライザーはひるむ。まだだ!

「滅竜奥義!!紅蓮爆炎刃!!!」

俺はライザーに滅竜魔法の奥義を叩き込んだ。

「忘れたか!!俺は火の鳥フェニックス!!炎は効かない!!」

「知ってるよ。だがそれはお互い様だ。おれは炎の滅竜魔導士。火は俺のエネルギー源だ。」

今の技を使ったのは分からせるためだ。お前の得意分野でも俺には遠く及ばない。」

「貴様...」

「しかも誰が炎しか出せないと言った?まだまだいくぞ!」

俺は今度は雷の滅竜魔法を奴に叩き込んだ。

「今度は効くぞ!!!」

「くそっ!!調子に乗るなあ!!!」

するとライザーは攻撃を食らいながら炎を纏った拳を繰り出してきた。

「効かないって言うてんだろ!食らえ!鳴御雷!!」

「があああ!!!」

ライザーは耐え切れず吹き飛んでいった。

「おい。立て。まだ終わってねえぞ。」

「くそっ!おい!この婚約には悪魔の未来に必要で大事なことなんだぞお前のような人間がどうこうしていいよなことじゃないんだ!!」
「そんなの俺の勝手だ。あえて言うとお前から上級悪魔の考えが気に入らない。今回のこともそうだ。」

純血や伝統なんかのことでガタガタ言うんじゃねえ!!!転生だろっ
がハーフだろうが、悪魔は悪魔だろうが!!!種族内で差別なんてしてん
じゃねえよ!

だから滅びそうになってんだろっが!!」

俺の怒号が空間全体に広がる。

「だから俺はお前を倒す!!」

そして俺は禁手を解除し魔力を高めた。

「はああああああああああ!!」

これで終わりだ!!

黒い魔力の渦が俺を包み込み俺は完全虚化をした。

(くっ!やっぱり限定解除したこの形態はやばいか!)

『グオオオオオオオオオ!!!』

「ひっ!なっ、なんだそのどす黒い魔力は!お、お前は何なんだ!!!」

『人間さ。ちょっと特殊な。』

そっつい俺は魔力を一点に集め、

『虚閃』

虚閃を放ちやつを跡形もなく消し飛ばした。

悲鳴を出す暇も与えずに……

再生した奴に意識はなく、勝負は俺の勝利に終わった。

「しっ!」

虚化を解くと

俺は血を吐き出した。

(相棒!!)

(大丈夫だ。心配ない。)

ライザーに近づこうとするとレイヴェルが現れ俺を睨みつける。

「文句があるならこい。いつでも相手してやる。」

そう言い俺はリアスの元に向かった。

第五話 気持ちと仲間

リアス side

私はマコトとライザーの決闘を見て啞然とした。

……圧倒的すぎる。

そう言い切れるほど彼は強かった。

マコトが私たちのところに来て、

「ふう、やっと終わった。……リアス先輩帰るぞ。」

と言い私の手を掴み引っ張る。

「あ……………」

するとお父様が目を瞑り私達の前に立つ。

「悪魔は契約を重んじるんだろ？なら、契約通り俺はリアス先輩を連れて帰る。そこをどけ。」

「……………」

そして私とマコトは魔法陣で部室に向かった。

零崎誠 side

俺はリアスと部室に向かっている。ちなみに瞬歩で動いている。

「……………」

お互い会話ができない。そら無理だわな。整理がつないんだろう。「さて、聞きたいことがあるんだろ？質問には全て答える。」

「……あなたはどつして私を助けてくれたの？依頼でも何でもないのに……」

「言っただろ？自分に正直になったって。今回のことは俺がしたくてやったんだよ。」

「……」

「あんた、自分を『グレモリー』としてではなく、『リアス』として見て欲しいって言ってたろ？そこが似てたんだよ。」

あの時の俺と…」

「あの時？」

「自分の存在意義がわからなくなってた時の俺とさ。」

俺は話した。ライザー戦で見せた完全虚化した時の魔力は俺の心の影であること。そして俺の力の大きさの異常さを…

それを俺は大切な家族の絆を失ったことを…恐怖心を抱いただろうか、俺を化物と思っただろうか。

俺は彼女から顔を背けた。するとリアス先輩に抱きつかれキスをされた。

「もうあなたは独りじゃない。」

「ありがとう…」

その言葉を聞いて俺は涙を流した。

リアス side

私達は部屋につきアーシアに出迎えられた。

「マコトちゃん！」

アーシアはマコトに抱きついた。

「お帰りなさい…」

「ああ…ただいま。」

「あとは質問はないか？」

「マコト、あなたはこれからどうするの？」

依頼といってもあなたは少なからず各勢力に影響を与えている。

「少なからず各勢力は接触を試みるはず。」

「ああわかってる。そのことはおいおい考えていくさ。それに俺はひとりじゃないんだろ？」

!!

「ええ。私達はグレモリーの名においてあなたを支えるわ。」

「あああと二人に話しておかなきやいけないことがあった。ここから先は他の眷属の奴らには秘密な？」

「どうして？」

「今はまだ会わせられないんだよ。特に木場と姫島先輩と塔城には」

私達はこのあとマコトの家族と本邸について聞かされた。

「なるほどね。祐斗達に言えないわけだわ。」

「わかつたくれたか？」

「ええ。」

「じゃ、行きますか。」

「どういっ。」

「本邸だよ。」

「このあと私とアーシアはマコトの本邸に転移した。」

零崎誠 side

俺はリアス先輩とアーシアを連れて本邸に転移し、入ると殺気が充滿していた。

はあ…。あいつか。大方リアス先輩とアーシアの気配で威嚇してるんだろ。

あいつ悪魔嫌いだからな。

そう思った瞬間。アーシアの背後に抜刀したカグラがいた。

「カグラ!!!!」

俺はカグラを押さえつけた。

「やっぱりお前か。」

「…っマコトさん。」

「この人たちは敵じゃない。全くお前の悪魔嫌いは筋金入りだな。」

「お帰りなさい。マコトさん。」

「ああ。ただいま。エルザ。」

さて、問題はここあとだ。

「彼女たちが例の？」

「ああ。こっちがリアス・グレモリーでこっちがアーシア・アルジェントだ。」

「はじめましてエルザ・スカーレットです。」

「はじめましてリアス・グレモリーです。」

「はじめましてアーシア・アルジェントです。」

双方が挨拶を交わす。

「で？マコトさん。どこの領域まで使いましたか？」

「いえ、あなたでは嘘をつきかねません。リアスさんに聞きましたよ。」

「お、おい。」

「禁手と火と雷の滅竜魔法。そして完全虚化しました。」

「マコトさん。まさかその状態で雷炎竜になってないでしょうね？」

「なっていない！確かに虚閃は使ったけど…あつ。」

「虚閃？何をやってるんですかあなたは！」

雷炎竜を禁止したのは魔力を圧縮して放つことをさせないためだったのに…

「いいだろ無事だったんだから！」

「言い訳無用!!」

「ぐえっ！」

エルザに飛び膝蹴りを食らわせられ、

『限定封印』!!

「今のは？」

リアス先輩が尋ねる。

「この人は、自分の魔力に体が耐えられないから、普段は魔力を九割を封印してるんです。」

なのにあなたは虚閃なんて使って何考えてるんですか!!」

このあと俺はエルザにこっぴり絞られた。

そして二人に、グレイ、冬獅郎、ガジル、カグラ、黒歌、ルーシー、ウエンディーを紹介し、ガジルはあんな態度だからアーシアに怖がられ

、グレイは初対面なのに二人に上半身裸で現れエルザに殴られた。はあ。あと黒歌ははぐれのこともあってか積極的に接しようとしなかった。

ウエンディーはアーシアと仲良くなった。さすが癒し担当!!

そしてルーシーはリアス先輩と話し込んでいた。ん？女子トークってやつか？リアス先輩は顔を真っ赤にしていた。

「あっ。そうだマコトさん。先ほど天狼島から連絡がはいつて近々来いってお二人から。」

!!!あの二人から!?憂鬱だ。

「今回は約束を破ったので絶対行ってくださいね。」

俺は死刑宣告を受けた。

「あっ、そうだ。俺ゼロで依頼すんのやめたから。」

「!!!はあ?!!!」

今度は家族全員に絞られた。

その説教で子供達も起きてきてもうどんちゃん騒ぎ。

あゝもう!!

後日、リアス先輩が本邸に引っ越してきた。

ふう。まゝた賑やかになるな。

まあいいっか。

第一話 修行

零崎誠 side

俺は今困惑している。ベッドには俺しかいないはず。

なのに今左にリアス先輩、右に黒歌がいる。

なぜだ。はあ。黒歌は事あることに俺に抱きついてくるがベッドまで来ることは今までなかった。

リアス先輩に至っては毎日だ。エルザに毎日叱られてるのに懲りないな。

だけど…二人共なぜに裸？これに関しては俺が怒られる。しかも、ルーシーとウエンディーにも

怒られる。そんなことを考えていると

「おはようじゃん。マコト」

「おはよう、マコト。」

「おはよう二人共。まあいいや。もうそろそろエルザ起こしに来るから服着てくれ。」

「コンコンー」

「おはようございます。マコトさ…。何やってるんですか。」

このあと俺はエルザに一時間絞られた。

「マコトさん。いい加減天狼島に行ってください。」

朝食をみんな食べているとエルザがそんなことを言ってきた。

食卓にはエルザ、アーシア、リアス先輩、黒歌、冬獅郎がいる。

子供達とルーシー、ウエンディーは庭で遊んでいる。ガジルとグレイ、カグラは依頼でいない。

「嫌だね。誰が好き好んであんなところ行くか。」

「そんなこと言ったらお二人泣きますよ？」

そんな会話をしていると

「あの、天狼島ってなんですか？」

アーシアが聞いてきた。

「天狼島は天界と冥界の狭間にある島で、気候は温暖なんですけどそのせいで

食肉植物や獰猛な魔獣もいるんです。」

「それがマコトが行きたくない理由？」

「いや、マコトが行きたくないのはそこにいる人たちについてだ。」

冬獅郎が答える。

「そういえばお二人って言っていましたね。」

アーシアが言う。

「天狼島にはマコトさんの師匠がいるんです。マコトさんは二人に頭が上がらないんです。」

「それだけじゃない。今のマコトじゃ勝てないくらい強いし、修行時代のトラウマがあるんだよ。」

「あんな修行二度とするか。それに今はガジルたちがいないし、マンツーマンなんて俺が死ぬ!!」

ぞっ!!

「この気配。来ましたね。」

「えっ?」

どっつやらリアス先輩たちは気づいていない。

「冗談じゃないぞっ!!俺はいかないからな!!」

『まあまあそんなこと言わずに。彼も待ちわびてるんですから。』

次の瞬間俺は魔力でできた縄で拘束された。

よりにもよってこの人かよ!!

目の前には白いワンピースを着た金髪の小柄な女の子だ。

まあ見た目だけなら可愛いが……

「メ、メイビス先生……」

「全く。あなたは連絡一つよこさないで師匠に対する礼儀がなってませんよ。」

「お久しぶりです。メイビス先生。」

「久しぶりですエルザ、黒歌、冬獅郎。ほかのみんなは依頼ですか?あ

「とそちらの二人は？」

「「うちのふたりはグレモリー家次期当主のリアス・グレモリーさんとその眷属のアーシア・アルジェントさんです。」

「どうもはじめまして。メイビス・ヴァーミリオンです。」

ふたりも挨拶をする。

「それじゃ、行きますか。」

!!

「やだー!!まだ死にたくない!!」

「失礼な。そこまでひどいことしたことないでしょ？」

「あなたたちの修行は死ぬのを通り越してまた引き戻されるんですよ」!!

「それだけ喋れるなら問題ないですね。」

俺は先生に引きずられていく。

「「「「「いってらっしやーい。」」」」」

「この裏切り者ーー!!!」

俺は今天狼島（地獄の一丁目）に転移をして、先生達の暮らしている小屋に向かっている。

「で？今回は何をやるんですか？」

「いまどのくらいまで限定解除を支障なくできますか？」

「・・・三割ですが。」

「はあ。修行サボりましたね。分かりました。今回の修行は『彼』に任じましょう。魔力に対する耐性をつけさせるには彼が一番ですし、何より体が怠けきってるのでまずは肉体強化です。」

話していると小屋につき、そこには黒髪の顔の整った男性がいた。

「やあ来たね。」

「お久しぶりです。ゼレフ先生。」

「ああ久しぶり。会話は聞いてたよ。じゃあ早速やるつか。」

「あの、今回の期間は？」

「二週間はかかるよ？」

「うわあ。これは死んだな。」

俺はゼレフ先生と川沿いに来ている。

「まず最初に君の怠け切った体を鍛え直す。」

「はい……」

「じゃあ行くよ。」

つぎの瞬間俺は先生に投げ飛ばされた。

「くっ……」

何だあの型は!?

「ああこの型は今回君に教える剣術だよ。」

剣術!? どう見ても体術だぞあれは!

「これは自分の体を刃とし戦う剣術『虚刀流』だ。今のはその中の『董』
と言っ技だよ。さあどんどん行くよ! 虚刀流『牡丹』。」

!! 今度は回し蹴りかつ!!

『鬼百合』、『桜』、『薔薇』、『梅』、『石榴』、『桜桃』、『野苺』

速い!! さばききれないっ! だが、あの『石榴』って技混成に使われ
てるな。ほかの技と比べて流れがスムーズすぎる。

「さて一部だけがこれが『虚刀流』だ。見た感想は？」

「はい。まず剣術と言われてる理由が手刀と足刀を多用するからなん
だったこと。そしてこれは先生だからかもしれないけど、

異常に速いです。瞬歩での移動術の倍は速い。そしてこれが一番
感じたんですけど、殺気がない。まるで……」

「人を殺すことに躊躇がない？」

「はい。正直この剣術は嫌いです。習得したくない。」

「それだけ理解してれば十分だよ。さ、続けようか。」

「先生!!」

「今回の修行は肉体を強くすることだけじゃない。それは自分で考えなさい。」

「あとと言つまでもないけどこの島の時間の流れは一年で一日換算だからね。」

「でも肉体は強化されたままで寿命は島に来た時と変わらないから修行にはもってこいですね。」

「じゃあ行くよ。」桔梗

「ついで俺の修行（地獄）が始まった。」

第二話 聖剣と復讐

零崎誠 side

修行が終わり俺は今天狼島から天界に向かってる。

ミカエルから連絡があり依頼を頼みたいとのことだった。

詳しいことはこれから聞くが、どうやら聖剣のことについてのことだった。

聖剣か…。いい思い出がないな。

つついたな。ミカエルがいる。

「すみません。わざわざお越しいただいて。」

「構わないよ。ちょうど天狼島にいたしな。で、依頼のことだが、詳細を聞こうか。」

「はい。先日、聖剣が奪われました。その奪還の手助けをお願いしたいんです。」

「そちらが派遣した部隊は？」

「聖剣使いが二人です。名前は紫藤イリナとゼノヴィアです。」

所持している聖剣は『破壊の聖剣』と『擬態の聖剣』です。」

「聖剣を奪った相手は？」

「墮天使組織『神の子を見張る者』の幹部コカビエルです。」

「…まず、聖剣を奪った相手に聖剣使いを差し向けるなんて鴨がネギしよってやってくるようなもんだ。」

あとコカビエル相手にそんな戦力で行くのも愚行だな。お前、俺にコカビエルの処理させる気だったろ。」

「う…：…すみません。ですがこちらでも割ける戦力がないんですよ。」

「言い訳はいい。で？その二人は今どこにいるんだ？」

「彼女たちはもう駒王町に向かっています。」

「って首謀者は駒王町にいるんかい！わかった。報酬はいつものように地獄蝶に渡せ。」

「よろしくお願いします。」

全くまた面倒事かよ。

エルザ side

先ほどミカエル様から連絡を頂き聖剣奪還の依頼が入った。

ふう。聖剣か。マコトさんから聞いてたけど『聖剣計画』なんてことまでして人間は

よっほど力に貪欲らしい。

「ただいま。」

「あっ、帰ってきた!!」

子供達の一人が言う。

「マコト兄ちゃんお帰りなさい!」

「おう。ただいま。」

「お帰りなさい。修行はどうでしたか？」

「ああ、死ぬかと思った。トラウマにはならなかったからいいが。」

「ところでミカエル様から依頼が来てましたけど。」

「帰りついでに天界に寄ったから知ってる。二日後には駒王町に着くらしいからリアス先輩について…あれ先輩は？アーシアもいないな。」

「リアスさんたちは今シトリー家の次期当主のソーナ・シトリーさんと眷属の顔合わせらしいです。」

「そうか。じゃあ依頼の件もあるから行ってくるわ。」

「リアスさん達が帰ってきてからでもいいのでは？」

「いや、ソーナにも伝えなきゃいけないことだ。だからちょうどいい。」

「そうですね。じゃ、いつてらっしやい。」

「ああ。行ってきます。」
そしてマコトさんは部室へ転移していった。

零崎誠 side

旧校舎オカルト研究部前に着いた。うん、まだいるな。見知らない気配があるが、眷属の紹介って言ってたからな。

コンコン！

「リアス先輩、入るぞ。」

部室に入るとそこにはリアス部長たち、そしてシトリー眷属がいた。

「よっ！ソーナ会長。」

「婚約パーティー以来ですね。零崎君。」
すると

「おいおい！気安く会長に話かけてんじゃねえよ！つうかなんで人間がここにいるんだ!!」

「いつは確か生徒会書記の二年の・・・」

「匙元志郎だったか？」

「匙、彼はこちらの事情は知っているから問題ありません。」

「悪魔になりたてのお前よりかは詳しいぞ。」

「なんだと!!」

「匙！あなたは私に恥をかかせる気ですか？それにあなたでは彼には勝てません。」

フェニックスの三男を倒したのは彼なのですから。」

「なっ!!ライザーを倒したのはゼロってやつなんでしょ!!こいつは・・・」

「そのゼロが俺なんだよ。威圧的になってるけど相手との実力差がわからないのに」

その行動は自殺行為だ。」

「くっ」「匙。」「・・・悪かったな。」

匙は握手を求めてきた。

「いや。別に気にしてない。」

すると匙は手に力を込めてきた。

「(人間が悪魔に勝てるわけないだろ!)」

はぁ。まったく。

「…もういいか? お前の行動一つ一つがソーナの価値に関わってる。そんな虚仮威しはやめたほうがいい。」

すると匙は苦虫を潰したような表情をしていた。

「そんなことより、ソーナ会長、リアス先輩。教会のエクソシストが二人この街に来る。」

「なぜあなたがそんなことを知ってるんですか?」

「ミカエルからの依頼でそいつらの手伝いをする事になったんだ。」

「この街で何をするの?」

「俺の一存で言うことはできないから、その二人が来てから言うかどうか決める。」

俺が事前に伝えたのはこの街を管理下に置いているあんたらとその二人を会わせて交渉をしてもらったためだ。」

「おい! お前は俺たちの味方じゃねえのかよ!」

「依頼をする上で必要なのは信頼関係だ。例え交流が深いとは言え鼻屑をして、

情報をながす訳には行かない。」

「分かりました。ではその二人はいつ来るのですか?」

「ミカエルはあと二日ですつくと言っていた。あと木場。」

「なんだい?」

「隠しても意味ないから最初に言っておく。今回の依頼には『聖剣』が関係している。」

「!!!」

木場の雰囲気が変わった。

はぁ。今回も面倒になりそつだ。

二日後の放課後俺はミカエルから連絡を受け教会のエクソシストを迎えに来ていた。

おっ来たな。って目立つぞあんなローブできやがって。

「あなたが零崎誠か。ゼノヴィアという。よろしく。」

「紫藤イリナです。よろしくお願いします。」

「零崎誠だ。早速で悪いがこの管轄の悪魔にあってもらう。今回の詳細はお前達の判断で話せ。無断でお前らが領地内に入ったら即戦闘だ。」

「そうなっても問題ないんだが。」

「好戦的だなお前。頼むから変な挑発しないでくれよ。」

「大丈夫です。私がいいますから。」

「ああ頼むわ。じゃ行こうか。」

俺は二人を連れてオカ研に向かった。

「コンコン！」

「リアス先輩。つれてきたぞ。」
すると中から

「どいぞ。」

「入るぞ。」

中にはソファアーにリアス先輩その後ろにグレモリー眷属がいる。警戒心がすごいな。まっ、聖剣の波動も感じてるだろうから当然か。

木場のは警戒心じゃなくて殺気だな。

先に話を切り出したのはイリナだった。

「先日、ヴァチカン、正教会側、プロテスタント側のエクスカリバーが奪われました。」

「今私達の持っているエクスカリバーを合わせてこちらには二本です。」

残り一本は行方不明だからな。

「これが私の聖剣『破壊の聖剣』だ。」

「そしてこれが私の聖剣『擬態の聖剣』。能力は名前の通り形を自在に変えられるんだから。」

能力まで言いやがった。こいつ遠まわしに自分たちが強いって言うてやがる。

刺激しないでくれ。

「ここからは俺が説明させてもらう。お前たちだと余計なこと言うからな。」

俺はリアス先輩たちに諸々の事情を話した。

聖剣を奪ったのがコカビエルであること。奴がここに潜伏していること。

でこの街での行動を許可して欲しいと頼んだ。その間互いに不干渉という条件で。

「よし話は終わりだ。帰るぞ二人共。」

で帰ろうとしたら、ゼノヴィアが

「もしかして『魔女』のアーシア・アルジェントか？まさかこんなところで会うとわな。」

「あの元『聖女』さん？まさか悪魔になってたなんてね。」

「まだ我らの神を信じているのか？」

「何言ってるのよゼノヴィア悪魔になった彼女が主を信仰しているわけないじゃない。」

「・・・捨てきれないだけです。今まで信じてきたものですから。」

「なら私に斬られるといい。今なら神のもとに断罪しよう。罪深くとも我らの神なら救いの手を差し伸べてくれるだろう。」

はぁ。挑発するなつてのに。

「おいお前ら。喧嘩売りに来たんじゃないんだろ。余計なことしないでさっさと帰るぞ。」

「ちょっと待っててくれないか？仲間を馬鹿にされて黙ってられないな。」

木場まで挑発しやがって、全く。

「お前らいい加減にしろ!!」

俺はゼノヴィアと木場に拳骨を張った。

「~~~~~。何するんだ。」

「お前はさっさと話にケリつけようって考えはないのか！おい、イリナ！ゼノヴィア連れてこの住所の家にいけ。」

そこがお前らの宿だ。さっさと行け！

「は、はい。」

イリナはゼノヴィアを連れて人間界の俺の家へ行った。

「どっぴうつつもりだい？マコトくん。」

「つもりもなにもお前の目は憎しみしかない目だ。アジアのための怒りじゃない。」

「・・・!!」

「それに無駄死にさせるわけにもいかないしな。」

「僕では勝てないと言っつもりかい？」

「ただでさえ二対一と不利なのに今のお前は冷静じゃない。それにたとえ冷静でもお前とあいつらの自力だと

お前の方が弱い。」

「それでも僕は復讐を果たさなきゃならない。」

「それは誰のためだ？まさか死んでいった同志のためか？」

「っ!!知っていたのか。」

「ああ『聖剣計画』のことも全部な。でおまえの復讐はだれのためのも

「のだ？」

「決まってる！同志たちの無念を晴らすためだ!!教会のせいであんなに死んでいった仲間達のために僕は死んでも…」

「下らねえな。」

「なんだと…もう一度言ってみる…」

「くだらないと言ったんだ。」

「貴様ア!!!」

木場が俺の胸ぐらを掴む。

「君に何がわかる！同志たちを救えなかった僕の無念が！自分だけのうのうと生きているこの罪悪感が！君に分かるのか!!」

「わからねえし、分かりたくもねえそんな自己犠牲の考え方なんか。

それにな…」

メキメキッ！

木場の腕を掴む。

「同志たちの為？復讐？死んでもだと？…あ？逃げてんじゃねえぞコラ。」

俺は殺気を放ちながら言う。

「自分が死んでも復讐を果たすだあ？ふざけんじゃねえ！そんなの前が楽になりたいだけじゃねえか！さっさと死んでらしくになりたいつてか。」

そこに生きる手段があるんならな、血反吐はこつが、泥水すすろうが精一杯生きやがれ!!!

あと…『死ににいく理由に他人を使つなよ。』

「ッ!!!」

俺は木場を引き剥がす。

「祐斗どこに行くの!?!」

「すみません部長。でも僕は…」

「祐斗!!!」

はあ。どっぴなることやら。

第三話 復讐と意志

零崎誠 side

俺はゼノヴィアとイリナがいる家についた。

「帰ってきたか。」

「お帰りなさい。零崎さん。」

「全く。お前らが余計な挑発したおかげでややこしくなったじゃねえか。」

「そんなことより。我々の目的は聞いての通り聖剣の奪還だ。相手は「カビエル

「この悪条件で任務を遂行しなければならぬ。」

「まあミカエルにも言ったが無謀の一言だな。お前らの信仰心を貶すわけじゃないが、勝算がなさすぎる。」

「それでも私達はそれを覚悟してこの街に来ました。」

「はあ、お前らはもう少し自分の命を……ん？」

「この気配は……」

「ピーンポーン……」

「お前らはここに居る。俺が出る。」

「はいよう。」

ガチャッ。

「なんだ塔城。まあこのタイミングだと木場のことか？」

「……はい。一緒に祐斗先輩を探すの手伝ってくれませんか？」

「わかった。……言っとくがこれは依頼の範疇だ。勘違いするなよ。」

「はい。」

木場の魔力を探す。

「………いた。！魔力が二つ……それにこの気配は……早く行くぞ。面倒になってやる。」

「はい。」

木場 side

「……………」

僕は何をやっているんだろう。主である部長を困らせて、マコトくんにも八つ当たりまでしてしまった。

でも僕は冷静になれなかった。僕の存在を否定されているかのようだったから……。

でもマコトくんのあの目……。あれは復讐を知っている目だ。しかもかなりどす黒かった。

そんなことを考えていると、雨が降ってきた。だが足元を見ると明らかに雨の色ではない液体が流れてきた。

「……」

次の瞬間、いきなり斬撃が飛んできた。この波動はっ！

「やや！君はあの時のクソ悪魔くんではありませんか！」

「お前はっ！フリード！それにその剣は……」

「こいつは『閃光の聖剣』。その神父をぶっ殺して手に入れたんだよん!!」

「エクスカリバーは一本残らず破壊する!!」

「やれるもんならやってみろっつてんだ！クソ悪魔が!!」

「はああ!!」

キン！キン！バキン！

「なっ！速い！騎士のスピードを使っている僕よりもっ！」

「なーに寝言言っつてんだ!!この聖剣は斬撃の速度を上げる聖剣だ!!クソ悪魔のスピードに負ける分けねえだろ！」

「くっっ！」

「さーてさてさてっ！これでさくっつと死ねよっ！クソ悪魔！」

くそっ！

ガッ!!

「あ……？」

「全く面倒だ。いちいち俺の仕事を増やすな……。」

零崎誠 side

全く俺の仕事を増やしてくれてんじゃねえよ。木場のやつ帰ったら説教だな。

ん？おいおい木場のやつ焦って体の動きが硬いなあれだと殺されるな。

「塔城。掴まれ。」

「どうしたんですか？」

「走っていくと間に合わん。瞬間移動をする。」

「わかりました。」

で、木場と白髪野郎の間に入り白刃どりをしているわけだが。

「全く面倒だ。いちいち俺の仕事を増やすな……。」

「マコトくん……！」

「おい木場。今のお前じゃ聖剣に勝てないって言った理由わかったか？お前は聖剣にしか目が行ってない。いくら聖剣が脅威だと言ってもそれも使い手しだい。」

そんなことにも気づけないやつに勝ちは来ない。」

「くっ……！」

はぁ、納得してないって顔だな。

「お前はあの時の変な炎で殴ってきやがったくそ人間じゃねえか！」

「おい白髪。お前はコカビエルとつながっているな。」

「企業秘密だ……！」

「答えたようなもんだ。」

「殺す……！」

「おいおいまだ質問は残ってんだぜ？お前は元々の聖剣適合者じゃねえな。なのになんで聖剣が使える？」

「それについては俺が答えてやるっつ。」

いきなり光の槍が投げられた。

「ずいぶんなご挨拶じゃないか。コカビエル。」

「ふんっ！下等な人間相手には十分だ。」

「そーかよ。ならこっちも無礼講でいいな？単刀直入に聞くぞ。今回はバルパー・ガリレイは関わっているか？」

「ああそもそも今回の計画を持ちかけてきたのはあいつだ。さすが『聖剣計画』の首謀者なだけはある。」

「!!!」

あゝあ。木場のやつ殺気立ってるよ。頼むから面倒事は…」呼んだかね「コカビエル?」…おい。

「バルパー」

「貴様がっ!」

「なんだ貴様は?」

「僕は聖剣計画の生き残りだ!貴様のせいで殺されていった同志たちの仇をとらせてもらっ!」

「ふん。結果に犠牲はつきものだ。」

「…いつは…気づいてきたか。」

「ん?」

「コカビエルも気づいたか」

「零崎さん!!」

「零崎誠!!」

イリナとゼノヴィアがやってきた。

「はあ。おまえら何で来た?」

「任務を遂行するためだ。」

「ええ!コカビエル覚悟!」

あのバカ!

「よせ!イリナ!」

「聖剣使いか。だが俺と戦おうなどとは千年早いわ!」

「コカビエルは光の剣でイリナを一閃しエクスカリバーを奪った。」

「きやあっ!!」

「よつと。死んでないな。はあ仕事が増えた。おいコカビエルお前の目的は戦争か?」

「ああもちろんだ。この地で事を起こせばサーゼクスあたりが来るのではないかと思ってな。」

「コカビエル。準備ができたぞ。長居は無用だ。フリード退くぞ。」

「アイアイサー!」

「俺たちは駒王学園で事を起こしこの街を破壊する。止めたければ来い！」

そして「カビエルたちは転移していった。」

「くそっ！逃がすかっ！」

ゼノヴィアも奴らを追いかけていった。

「塔城、木場。学園に行くぞ。早くとめないとな。」

「はい。」

「……何も聞かないのかい？」

「聞いて俺が口出ししてもお前の問題だ。あの時俺が言ったことの意味わかるか？」

『死にいく理由に他人を使うな』のことかい？」

「ああ。あれはなお前が死ぬことで悲しむやつの気持ち、そしてお前自身の未来、生きることへの冒涇。これが一番重要なんだが託された思いの意味だ。」

「え？」

「木場、確かにお前は同志たちの思いを受け継ぐべきだ。けどな、同志たちはお前に復讐を望んだのか？今となってはそれはわからない。だからなおさらお前」

は生きなきゃならない。同志たちの意思を理解するためにも。彼らが生きていた証はお前が持っているんだからな。」

「マコトくん。」

「裕斗先輩、私も先輩がいなくなるのは嫌です。」

「小猫ちゃん……。」

「湿っばいのは後だ。今リアス先輩たちに連絡を取った。生徒会の連中が結界を張っていていてくれる。あいつら学園で魔法陣を展開してやがる。行くぞ。」

「はい。」

「うん。」

俺たちは学園へと瞬間移動した。